

極真空手に魅せられた日

安藤浩二氏が代表を務める株式会社RitaX（リタックス）は、建築物の骨格となる構造設計を専門とする企業だ。地震や風圧といったあらゆる外力から建物を守る「生命線」を設計する、高度な技術集団。このRitaXが今年7月、東京証券取引所TOKYO PRO Marketへの上場を果たした。創業者である安藤社長らの歩みを知ると、人々にとっては、「偉業」と呼んでも決して大げさではない出来事だった。

「あまり表には出していませんが」そう前置きしてから、安藤さんが自身の青春時代を改めて振り返る。「建築設計事務所などを経営していますので、それなりの学を修めているように見えると思うのですが、全く違います。工業高校の土木科出身です。しかも卒業した1980年は、漫画『ビー・バップ・ハイスクール』が世に出る数年前。ツッパリブーム前夜ですから、さらに荒れていた時代です。私もご多分に漏れず、いわゆる不良でした」

高校入学時の成績は40人中39番。「でも1人は病欠だったので、正真正銘のビリでした（苦笑）」。入学したとたん「生意気だ」と呼び出されては殴られ、殴り返す日々が始まる。体育館の裏で繰り広げられる、ツッパリ特有の喧嘩のヒエラルキー。負ければ惨めだ。独学でボクシングを習い、卒業する頃には校内で5本の指に入るほど成長していた。とはいえ、さらにルーツを辿れば「神童」と呼ばれた時期もあった。「東海道五十三次からJRの駅名、星座や星雲の名前：何でも覚えてしま

まう子どもでした。でも、3歳上の兄が極めて優秀で、常に比較されていて。その反発心から次第に勉強をバイコットするようになり、大学進学も拒否。「一族で大学に行かないのはお前だけだ。安藤家の恥だ」などと言われましたが、とにかく早く家を出て、独立したいという気持ちが強かったのです」

18歳でゼネコンの大手企業に就職したが、配属されたのは意外にも設計部門だった。

「高卒者は現場事務所に行くのが一般的でした。まして私は高校の成績は赤点ばかり。私自身、高倉健さんが青函トンネルの工事に執念を燃やす技師を演じた映画『海峡』に感化され、『俺は現場技師になる、土木屋を目指す』と思っていたんです。それが、思いもよらず設計部門に。これが私の人生を変えていくことになるわけですから、まさに運命だったのかも知れません」

運命の出逢いがもう一つ。新入社員として働き詰めの日々を送りながらも、どこか満たされないものを心の内に感じていた19歳の秋だった。「表現したいですが、『もっと燃えるようなものが欲しい』と欲っていました。そんなある日、働いていた千葉の木更津駅前で1枚のポスターが目飛び込んできて。極真会館小嶋道場の練習生募集を呼びかけるものでした。見た瞬間、これだ、と高校の頃、それなりに腕っぶしが強かったし、自分ならやれるだろうと高をくくっていたんです」

小学5年生との衝撃の出会い

入門した安藤氏は、白帯を締め、基本の構えや所作を学び、初めての

工業高校「学年ビリ」から東証上場へ——極真の道場訓が教えてくれたこと

株式会社RitaX代表取締役

安藤浩二の
ファイト&ライフ

小学5年生の緑帯に完敗した19歳の青年。「空手ってすごい」——その衝撃が人生を変えた。極真空手の道場訓と稲盛和夫氏の経営哲学を心の支えに、学歴の壁を越え、構造設計会社を起業。そして2025年7月、TOKYO PRO Marketへの上場を果たした。安藤浩二氏が語る、「真（まこと）を極める」生き方とは——。

取材・文_藤村幸代
text=Yukiyo Fujimura
撮影_中原義史
photo=Yoshifumi Nakahara

極真空手 道場訓

- 一、我々は心身を錬磨し確固不拔の心技を極めること
- 一、我々は武の神髄を極め機に発し感に敏なること
- 一、我々は質実剛健を以て克己の精神を涵養すること
- 一、我々は礼節を重んじ長上を敬し粗暴の振る舞いを慎むこと
- 一、我々は神仏を尊び謙譲の美徳を忘れざること
- 一、我々は知性と体力とを向上させ事に臨んで過たざること
- 一、我々は生涯の修行を空手の道に通じ極真の道を全うすること

稲盛和夫 経営十二か条

- 1.事業の目的、意義を明確にする
- 2.具体的な目標を立てる
- 3.強烈な願望を心に抱く
- 4.誰にも負けない努力をする
- 5.売り上げを最大限に伸ばし、経費を最小限に抑える
- 6.値決めは経営
- 7.経営は強い意志で決まる
- 8.燃える闘魂
- 9.勇気を持って事に当たる
- 10.常に創造的な仕事をする
- 11.思いやりの心で誠実に
- 12.常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で



今年7月、東京証券取引所TOKYO PRO Marketに曙れて上場を果たす。



Koji Ando

1961年、大分県出身。大分県立中津工業高校土木科卒業。1980年、ゼネコンに就職し、設計部門に配属。81年10月、極真会館小嶋道場木更津支部で空手を始める。1989年、設計事務所A&D 創業。1990年、日本ベクトルエンジニアリング有限会社(現株式会社RitaX)設立。33歳で極真空手を再開し、41歳で初段。52歳で三段を取得。2025年4月、社名をRitaXに変更。2025年7月、東京証券取引所TOKYO PRO Marketに上場。極真会館小嶋道場所属。

組手に挑んだ。対戦相手は緑帯の小学5年生。「舐められたもんだな」。だが、その不満は組手が始まった瞬間に吹き飛んだ。「とにかく、驚くほど強くて全く歯が立たないのです。ステップイン・アウトで素早く出入りするので、こちらの攻撃は当たらず相手の技ばかり受け続ける。私が経験してきた素人の喧嘩とは次元が違う、別世界のものに触れた気がして、『空手って凄いな』と素直に感動しました」この小学5年生に出会っていない

れば、今の自分はない。そう断言できるほど、この屈辱的な敗北は安藤さんに人としての謙虚さ、そして空手という「道」の奥深さを悟らせた。痛みと怪我に耐えながら、ひたすら基本の「受け」を学ぶ日々。稽古のたびに唱和する道場訓も、最初は意味が分からず呪文のように唱えていたが、技が身体に染み込むように、一つひとつの言葉の意味が心に沁み ていった。

数年後、若き安藤青年は自ら志願してサウジアラビアの海外支局に異動する。砂漠に火力発電所を作るというプロジェクトに加わったのだ。ここでも、空手の経験がおおいに役立ったと安藤さんは振り返る。「多国籍の人々が集まるキャンプでは、夜になるとちよっときな臭い空気が漂うことがありました。でも、私は道着を持参して、自作のサンドバッグを叩いたりしていたので、一目置かれていたとしても言いますが、おかげで海外の人々と対等に認め合い、交流を持つことができました」現地にはフィリピン人が開いてい

た空手道場があり、誘われるまま組手の相手を務めたこともあった。「私は当時、黄色帯でしたが、木更津道場での組手そのままだと激し技を入れたところ、翌月、再訪してみると、それまで白、茶、黒しかなかった帯の色が、白、青、紫、緑へと増えていて、黄色が茶帯のすぐ下になっていました（笑）。そんな経験を含め、すごく楽しく、面白く、ダイナミックな2年半を過ごさせてもらいました」